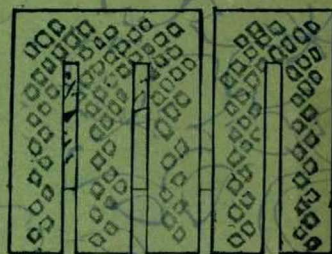


校注日序
源氏物語新抄
文藝新篇

佐伯梅友編

武蔵聖書院刊

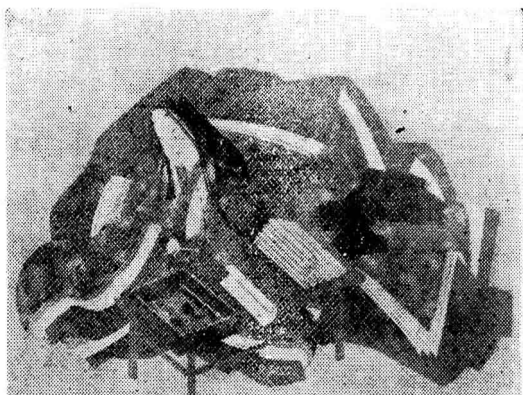


校註日本文芸新篇

源氏物語新抄

東京教育大学教授
文学博士

佐伯梅友編



昭和二十五年十月廿五日
昭和二十五年十月三十日
昭和二十七年三月十五日
印 刷
發 行
二 十 三 版
發 行

編 著 者
の 検 印
省 略

校註日本文芸新篇

源氏物語新抄

定価 二〇〇円

編 者 佐 伯 梅 友

東京都千代田区神田錦町三ノ十一
發行者 前 田 武

東京都文京区白山御殿町十八番地
印刷者 柿 崎 忠 一 郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

發行所 會社 武蔵野書院
合名

電話東京 (四) 四八五九番
振替口座東京六七一四六番

(一) だんだんちえづき大人らしくなつてゆかれる御容貌、お氣立て
(二) 世にまゐだ、めつたにないというのが、「ありがたし」の原由である。
(三) それみきれないからである。これならあの御寵愛も当然だと考えるからである。
(四) こういうおりつばな方もこの世にお出ましになることであつた。うかがはれて知りえたという心もちが「なりけり」にうかがはれる。
(五) あきれるほど目をみはつておられる。「み子が「もの」の心しり給ふ人」が目をおどろかすのではなく、「もの」のおどろかす」は、眠っている人を目をさませるとか、ぼんやり氣づかずにいるのを氣づかせるとかいふ心もちに用いる語である。
(六) 桐壺の更衣をさす。
(七) ちよつとした病氣になやんで。「……にわづらひて」(七四頁)
(八) お里に退出しようとなさるのだから。
(九) この數年來、この病氣はいつものことになつていられるので。「あつしさ」は熱っぽさ。病氣。「あつし」という形容詞(二三頁参照)から出た名詞。
(一〇) ほんの五六日のうちに、危篤の状態になつた宮中で死んではいけなから、しいて退出を願うのである。
(一一) ひよつと、とんでもない恥をうけでもしてはと。「もこそ」に注意。
(一二) 他の女御更衣などに知らないようにこつそりと退出するのである。ここに一出で給ふ」と大体をまづ述べ、つぎに、その時の有様をこまごまと述べた。
(一三) せめて見送りでもと思はれても、身分がそれさなさいなさい、はれはれしない氣もちを。「だに」の意味と、あり所に注意。今の人がいうとすれば、「消え入りつづものし給ふ」にかかる。

しりのみ多かれど、このみ子のおよすけもておはするみかたち・心ばへ、^二ありがたくめづらしきまで見え給ふを、^三えそねみあへ給はず。ものの心しり給ふ人は、^四かかる人も世に出でおはするものなりけりと、^五あさましきまで目をおどろかし給ふ。

その年の夏、御息所、^六はかなきこちにわづらひてまか^八なむとし給ふを、いとまさらにゆるさせ給はず。年ごろ常のあつし^七さになり給へれば御目なれて、「なほしばしこころみよ」とのみ宣はするに、日々^九におもひ給ひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給ふ。かかるをりにも、^{一〇}あるまじき恥もこそと心づかひして、み子をばとどめ奉りて、^{一一}忍びてぞ出で給ふ。限りあればさのみもえとどめさせ給はず、御覽じだに送らぬおぼつかなさ^{一二}を、いふ方なくおぼさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面^{一三}やせて、いとあはれと物を思ひしみながら、言に出でても

(一四) かわいらしげな人

(一) 生きてゐるのか生きていないのかという状態に、すっかり力もなくなつていらつしやるのを。「も

(二) 目もなどともほんにだるそうで、いよいよぐたりと、正体もないようすで横になつてゐるので。

(三) 「わかれのけしき」は、自分で自分が自分であるかどうか意識できないような状態をいう。

(四) 輦車(輿に輪をつけて手でひくもの)のつて出入りするところをお許しになるみことのり。病氣が機会ではあるが、この一回のための臨時措置ではなくて、これによつて更衣の待遇があげられたことになるらしい。

(五) 更衣のへやにおいで遊ばされては。

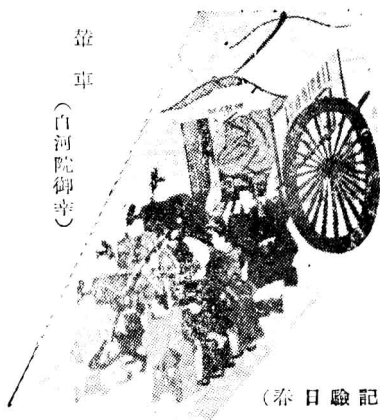
(六) すこしも出でおゆかせにならない。「ゆるす」は手を放す意。

(七) 死出の旅路においてでも、あとに残つたり先に行つたりはしましいつしよにゆこう。死出の旅路は、いやならゆかないでもすむものではなく、その時がくればだれでもゆかなくてはならないものであるから、限りある道といつた。「む」は言い方をやわらげたのである。

(八) 病氣が重いからといつて、「つきに」「死出の旅でもないこの別れの道に」と補つて考える。

(九) もつたかと思ふのである。こんなにまでおつしやつていただけるのかというのである。

(一〇) 限りの道だとして別れてゆく道(死出の旅路)が悲しいので、いき(生き)たいのは命でございませわ。からだはすこしもいき(行き)たくはございませんという意をふくむ。「いかまほし」に、生かまほし、行かまほしの二義をもたせて、いかまほしきは命であつて、からだはないという心もちを述べたのであつて、この「生く」は、「生けるもの」などの場合と同じくカキケ活用である。「なりけり」というところがいまはじめてしみじみとそれを感じてゐる心もちが出てゐる。



輦車

(白河院御幸)

(春日 驗記)

聞えやらす、あるかなきかに消え入りつつものし給ふを御覽するに、來し方行

給ひては、さらにゆるさせ給はず、

「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとも、うちすててはえ行きやらじ。」

と宣はするを、女もいといみじと見奉りて、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」

(一) みかどが。
 (二) 母更衣のなくなった時は、何もおわかりにならなかつたのにお残し申して行くのが悲しいということ。
 (三) あつたに對して申して行くのではありません、いつまでもつれて行きたいというのではありません、いつまでもお世話を申しあげたいのという心もち。
 (四) 若宮は、祖母君のなくなりたいまは、(里に行かずに)宮中にばかりおいでになる。
 (五) 読書始めの儀式。
 (六) ひょうとしたり長生きができないのではないかと心配するからである。
 (七) (母君の生きているところは、しかたもなかったけれど)せめて母君のいない今なりと、かわいがつて下さい。
 (八) 東宮である一のみ子の母、右大臣の女御のすんでおいでの御殿。これによつてこの女御を、弘徽殿の女御という。
 (九) ものの情を知らないものとして引合ひに出している。
 (一〇) しぜんにとこつとなつてしまふにちがいないような(かわいらしい)様でいらつしやるから。「さうな給へれば」といふ言ひ方に注意。「こちす」なども、口語で「きもちがする」といふように、「こちす」と「す」との關係は主述關係で、これらの場合の「す」は「あり」に近い意になつてゐるものと考へられる。
 (一一) (さすがの弘徽殿の女御も、この君を)いやいや、あつちへおいでなどと遠ざけることがおできにならない。
 (一二) 弘徽殿の女御の御腹。
 (一三) 他の女御更衣たちも、この君からは、かくれ顔を見せないようには、ふるまわれない。
 (一四) 若宮は、こんなお若い今から、品のある美しさをそなへ、向かいあつてこちらが氣おくれするよう有様でいらつしやるから。
 (一五) のんきに相手にはできないなぐさみものだ。

光る源氏の生ひたち

これを悲しびおぼすこと限りなし。み子六つになり給ふ年なれば、この度はおぼし知りて戀ひ泣き給ふ。年ごろなれむつびきこえ給へるを、見奉り置けなれば、あまりにおそろしきまで御覽す。「いまは、たれもたれも、え憎み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘徽殿などにもわたらせ給ふ御ともには、やがてみすのうちに入れ奉り給ふ。いみじき武士・あたかたきなりとも見てはうち笑まれぬべき様のし給へれば、えさし放ち給はず。女み子たち二所この御腹におはしませど、なずらひ給ふべきだにぞなかりける。御かたがたも隠れ給はず。いまよりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしう、うちとけぬ遊びぐさに、た



笛(陸能源氏 鈴虫)

(一) さるものとしてとりのけて今はふれずの意。い
うにも及ばずという心もちである。いまでも、「かれ
の頭は頭として、努力にも感心する」「かれの頭はそ
れとして、努力にも感心する」というようないい方を
するのと考えあわせよ。

(二) いやになつてしまひそうな。「うたてぞなりぬ
べき」は「人の御様」にかかるのであるが、「ぞ」の方
は、「なりける」にまで入っている。

(三) 「人の御様」が一つづきになる。前にあつた「人
の御おぼえ」(一三頁)参照。

(四) 高麗の國の人の、來朝しているものの中に、す
ぐれた人相見がいたのを。高麗はいまの朝鮮の地に
あつた。

(五) 寛平御遺詔「外蕃之人必可召見者、在籬中見之、
不可直對耳。」

(六) 來朝の外國人を接待するのに設けてあつた館。
相人はここに宿泊していたのである。

(七) み子をおつれ申しあげた。

(八) くびをかき上げて、不審がる。「かたぶく」はカ
キケ活用で、相人としてはくびをかたぶけるのであ
るが、わきからくびのうごきを見て、くびがかたぶ
いてといった心もちである。こうした小さなところに
も、昔と今と、いい方のちがひがある。

れもたれも思ひきこえ給へり。

わざとの御學問はさるものに

て、琴・笛の音にも雲居をひび

かし、すべて言ひつづけば、こ

とごとしう、うたてぞなりぬべ

き人の御様なりける。

そのころ高麗人の參れるがなかにかしこき相人ありけるをきこしめして、宮

のうちに召さむことは宇多の

帝の御いましめあれば、いみ

じう忍びて、このみ子を鴻臚

館につかはしたり。み後見だ

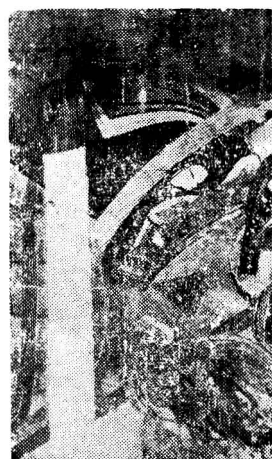
ちてつかうまつる右大辨の子

のやうに思はせて率て奉る。

相人おどろきて、あまた度か



高麗人み子を相す
(十帖源氏所載)



琴(隆能源氏 蓬生)

- (一) 帝王という上なき位。
 (二) 人だ。
 (三) 帝王の位にのぼるという方面で見ると。
 (四) 「ことあらむ」をもつと遠慮してやわらかくしたい方。
 (五) 攝政・関白というような朝廷の柱石となつて天下の政を輔佐するという方面で見ると。
 (六) 右大辨もまことに学問のすぐれた学者で。
 (七) 相人と。
 (八) 漢詩。
 (九) 世にめずらしい。
 (一〇) 世にめづらしい。「別れとなつたら、それがかえって悲しいにちがいないという心もち。
 (一一) しみじみするような詩の句。
 (一二) すばらしい。
 (一三) 「多くの物」とある本もある。「たまはす」は下さる意。相人である。
 (一四) 自然とこのうわさがひろがって。
 (一五) みかどは口からお出しにはならないが、「この語は」「おのづから事ひろがりて」の前にある方がおだやかである。
 (一六) 東の祖父である右大臣。」弘徽殿の女御の父君である。
 (一七) みかどのお心であるからいう。↓「かしこきみかど」(一五頁)
 (一八) 日本在來の人相の見方をこころみて。
 (一九) 親王にもなさらなかつたのであるが。「親王宣下(しんげ)せんげ」があつてはじめて親王となる。
 (二〇) 親王を「みこ」といふ。
 (二一) 親王の位は、一品から四品まであり、なんの位もないのが、無品親王である。無品親王で外戚のうしろだてのない親王として、ふらふらさせてはおくまいという心もち。
 (二二) 自分もいつまで生きていられるかわからないのだから。「よ」はこの世に生きている年。
 (二三) 臣下でいて、朝廷の輔佐をするのが、將來も(安全で)心丈夫なこと。

たぶきあやしぶ。

「國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、みだれうれふることやあらむ。おほやけのかためとなりて、天の下をたずくる方にて見れば、またその相たがふべし。」

といふ。辨もいとさえかしこき博士にて、いひかはしたることどもなむ、いと興ありける。ふみなど作りかはして、けふあす歸り去りなむとするに、かくありがたき人に對面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、み子もいとあはれなる句を作り給へるを、限りなうめで奉りて、いみじき贈り物どもをささげ奉る。おほやけよりも多く物たまはす。おのづから事ひろがりて、もらさせ給はねど、春宮の祖父大臣など、いかなることにかと、おほし疑ひてなんありける。帝、かしこきみ心に倭相をおほせて、おほしよりにけるすぢなれば、いままでこの君を親王にもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこかりけりとおほしあはせて、無品親王の外戚のよせなきにてはただよはさじ、わがみよもいと定めなきを、ただ人にておほやけの

(一) 學問。

(二) 格段にすぐれていて、ただ人でおくにはほんとは惜しいけれど。

(三) 東宮になり、天皇にもなるうとするのではないかと疑いをうけそう、それでは危険だからという心もち。

(四) 星で運命をうらなうすべて宿曜という。「道の人」を例の一つづきに見て、「宿曜の道の人」「かき道の人の」というのを一つにした言い方と考える。

(五) みかどは、おきめになつていられる。「おきて」は「おきつ」という動詞の連用形。「おぼし」が敬語なので「給ふ」などを下にそえるに及ばないのである。

(六) 御息所とすっかり同じではなくても、ならばものとお思ひになることが出来るような人でもあればと思うが、それさえめつたにない世の中だなあ。

(七) 先帝の第四皇女で、ごきりようがすぐれていらつしやるといふ評判が高くおありで、また、その母であるおきさきが非常にお育てになつていらつしやる方を。」先帝と桐壺のみかどとの関係はよくわからない。

(八) みかどのおそばに奉仕している典侍。

(九) 四の宮の御幼少でいらつしやつた時から。

(一〇) 先帝、先帝、当帝と、三代の宮づかえに、自分は、つづいて来たのであるが。「長い宮中生活を歴ているよしをいう。

(一一) 似て。

(一二) ↓「ありがたき人」(二三頁)

(一三) ごきりようよしでいらつしやいます。「なむ」の下に「おはします」などが省略された言い方。

(一四) 母后のもとへ、ねんごろに(四の宮入内の所望を)申しあげなされた。

み後見をするなむ、行く先もたのもしげなることとおぼし定めて、いよいよ道道ののえをならはさせ給ふ。際ことにかしこくて、ただ人にはいとあたらしけれど、親王となり給ひなば、世の疑ひおひ給ひぬべくものし給へば、宿曜のかしこき道の人に考へさせ給ふにも、同じさまに中せば、源氏になし奉るべくおぼしおきてたり。

年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るるをりなし。慰むやと、さるべき人々を参らせ給へど、なずらひにおぼさるるだにいとたたき世かなと、うとましろのみよろづにおぼしなりぬるに、先帝の四の宮の、御かたちすぐれ給へるきこえ高くおはします、母后よになくかしづききこえ給ふを、上にさぶらふ内侍のすけは、先帝の御時の人にてかの宮にも親しう参りなれたりければ、いはけなくおはしましし時より見奉り、いまもほの見奉りて、「うせ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮づかへにつたはりぬるにえ見奉りつけぬに、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひいでさせ給へりけれ。ありがたきかたち人になむ」と奏しけるに、まことにやとみ心とまりて、ねんごろ

- (一) 東宮の母である女御、すなわち弘徽殿の女御。
 (二) たちがわるくて。いじわるで。りっぱな男だといふ意
 ない意を、人がいないといひ、りっぱな男だといふ意
 を、男だといふと同様に、よいさががない意で、さ
 がなしというのである。
 (三) 人の目にもつく有様で、とるにも足りないよう
 にとり扱われた例も思ひはばかれない。もてなされの
 「れ」は受身。「ゆめし」といわないで「ゆめしう」と
 いったのは、余情をのこした言い方。
 (四) 御用心なまつて。
 (五) 四の宮のおそばにおつかえしている女房たち。
 (六) 乳母(めの)などであるうか。
 (七) 宮中の生活。
 (八) 「慰むべし」と(慰んだがよろしいと)というこ
 ころを、引用文式でなくいいたので「慰むべく」とな
 った。「おぼしなりて」「……給へり」などは、兵部卿
 の親王がまじっているための敬語である。
 (九) なるほど。典侍のいった通り。
 (一〇) 藤壺は(先帝の四の宮というわけで)御身分
 がすぐれていて、人の思ふところも申し分なく、だれ
 も、あんなやつというように悪くお言ひ申すことはお
 できにならないから。「人の御際」は、例の一つづきに
 なるもの。「人も」は女御更衣たちをさすので、動詞に
 「給ふ」が用いてある。
 (一一) 御寵愛を自分一人に引きうけて、これが不足
 というところがない。
 (一二) 桐壺の更衣は、だれもあの人(女御)寵愛を占
 するの(が)当然だとお認め申さなかつたのに、御寵愛が
 いじわるく深かつたのであつた。
 (一三) これまでとくらべて格段に。
 (一四) うれしいことであつた。「みかどの御上を氣
 づかう周囲の人々の心」
 (一五) 前に「源氏になし奉るべくおぼしおきてたり」
 とあつて、源氏をたまわつたことはまだ書いてなかつ
 たが、それは省筆されたのである。
 (一六) みかどの御そば。
 (一七) みかどが足しげくおいでになる女御更衣がたは、

光る源氏の生ひたち

に聞えさせ給ひけり。母后、あなおそろしや、春宮の女御のいとさがなくて、
 桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされしためしもゆめしうと、おぼしつづ
 みて、すがすがしうもおぼし立たざりけるほどに、后もうせ給ひぬ。心細きさ
 まにておはしますに、「ただわが女み子たちと同じ列に思ひきこえむ」と、い
 とねんごろに聞えさせ給ふ。さぶらふ人々・み後見たち・御せうとの兵部卿の
 親王など、かく心細くておはしますまむよりは、うち住みせさせ給ひて、み心も
 慰むべくおぼしなりて、参らせ奉り給へり。藤壺と聞ゆ。げに、御かたちあり
 さま、あやしきまでぞおぼえ給へる。これは、人の御際まさりて思 なしめで
 たく、人もえおとしめきこえ給はねば、うけばりてあかぬ事なし。かれは、人
 もゆるしきこえざりしに、み心ざしあやくなりしぞかし。おぼしまぎると
 はなけれど、おのづからみ心うつろひて、こよなくおぼし慰むやうなるも、あ
 はれなるわざなりけり。

源氏の君は御あたり去り給はぬを、まして、しげくわたらせ給ふ御方は、え
 (おともについてくる源氏の君に対して)恥じて顔を見せないようにはなまりきれない。

- (一) 藤壺の君は。
 (二) 源氏は自然と藤壺の君をちらちらと見申しあげる。
 (三) ほんとにうれしい。
 (四) なれつき、とって見申しあげたいものだ。
 (五) みかど。主上。
 (六) みかどの藤壺に仰せられることば。
 (七) 妙に、あなたがいたを、この子の母にお見立て申しあげられそうな氣がいたします。
 (八) 無礼だと思ひにならないで。
 (九) ↓(二一頁)
 (一〇) 桐壺の更衣は、あなたに似ていたから。
 (一一) あなたが更衣のようにお見えになるのも、この子の母として不似合ではございません。
 (一二) おたのみになつていられるので。
 (一三) 源氏の。
 (一四) ちょっとした花やもみぢにつけても。」春の花、秋のもみぢで一年中のもを代表させた。
 (一五) 「見ゆ」のこの用法に注意。
 (一六) 他の方向に対するよりは段ちがいに、藤壺の君に心をおよせ申されるので。
 (一七) 藤壺とも御なががしつくり行かないので。
 (一八) いやらしい。「物」からでたシク活形容詞。

恥ぢあへ給はず。いづれの御方も、われ人に劣らむとおぼいたるやはある。とりどりにいとめでたけれど、うちおとなび給へるに、いと若うつくしげにて、切に隠れ給へどおのづからより見奉る。母御息所はかげだにおぼえ給はぬを、いとよう似給へりと内侍のすけの聞えけるを、若きみこちにいとあはれと思ひきこえ給ひて、常に参らまほしう、なづさひ見奉らばやとおぼえ給ふ。上も限りなき御思ひどちにて、「なうとみ給ひそ。あやしくよそへきこえつべきこちなむする。なめしとおぼさでらうたうし給へ。つらつき・まみなどはいとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも似けなからずなむ」など聞えつけ給へれば、をさなごこちにも、はかなき花・もみぢにつけても心ざしを見え奉り、こよなう心よせきこえ給へれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御なかそばそばしきゆゑ、うちそへてもとよりの憎さもたちいでて、物しとおぼしたり。

かくて、源氏の君は、世の人からは光る君といわれ、父帝の愛を一身にうけて、十二歳で元服する。その儀式も、先年おこなわれた春宮の御元服に

歐洲に於ける写真小説のはじめといわれている伊太利のボツカチオの十日物語は、ある後村上天皇の正平八年（一三五三）に公にされました。即ちそれは、先覚の方々も指摘せられてありますように、源氏におけること約三百五十年であるのであります。加之、長篇の大小説という点で有名な支那の水滸傳がもし施耐庵の作なら、（羅貫が書継いだとしても）、是亦約一世紀以上の隔たりがあるのであります。更に、歐洲で最初の女流小説家の称ある佛蘭西生まれの詩人マリ・ド・フランスは、傳へられるように十二世紀末、十三世紀初の人ならば、彼女に世界最初の女流小説家たる名を許すことは出来なくなるのであります。況や彼女も、小説家というよりも敘事詩の人であるに於てをやであります。即ち源氏物語は、どうしても世界で最も古く最も大きな小説の一としての正しい位置を世界の文芸史の上に、是非とも要求せねばなりません。（島津久基博士「源氏物語序説」）

光る源氏の生ひたち

も劣らぬ有様であつた。加冠の役は左大臣がつとめたが、そのまなむすめが源氏の君の妻と定められ、元服と同時に、源氏は左大臣の邸に通う身となった。その姫君は時に十六歳、物語では、源氏の妻としてのこの人を、「葵の上」という。源氏はこうして結婚はしたけれど、心はいつも藤壺の上にはかりあつた。しかし元服の後はおとなになつたのであるから、もう以前のように藤壺のみすのうちにも入れられない。音楽の御遊びなどのをりに、みすのうちでひかれる藤壺の琴の音 きいたり、ほのかにもれ聞えたりするその聲が、はかない慰めとなるにすぎなかつた

「光る源氏の生ひたち」で、つぎのようなことを調べてみよう。

- 一、ここに出てくる人物を書き出し、関係のあるものはまとめて、系図を作ろう。
- 一、桐壺の更衣という人がだんだんはつきりしにくる。その有様を調べてみよう。
- 一、少年源氏の人にすぐれた有様は、どんな風に書かれているだろうか。
- 一、女御更衣などの宮中生活について考えてみよう。

(一) 五月雨のころと考えられる。この年、源氏は十七歳。
 (二) 宮中の御もであつた。
 (三) 左大臣家では、源氏の妻の父なる左大臣が、待ち遠に候へしくお思ひになるのを、間接的に言ひあらはした言ひ方。
 (四) 源氏の君のためにおととのえになりなり。男の装束などは妻の家でととのえる君だちは、もつぱら源氏の君の御宿直所のおつかえをおつとめになる。源氏の君の御宿直所は、昔、母更衣のすんでいた桐壺である。
 (六) 内親王の御腹に生まれた中將。時に頭の中將で、源氏の親友である。この人の母は、桐壺の帝の御妹、葵の上もこの腹に生まれた。
 (七) この中將は、右大臣の四の君と結婚して、そこへ通う身であり、右大臣はこの人を心をこめて大切に、あつかうのである。中將は四の君に対してあまり熱がなく、通つて行くのを大儀がとて、有様なのをいふ。男が妻のものと通つてゆくのを「すむ」といふ。その「すむか」といふ。
 (八) 源氏の君が、葵の上に気がおちらず、ここへ通つて来るのを大儀が、この君も」といふ。
 (九) 中將の自宅、すなわち左大臣家である。いふ。
 (一〇) 自分の部屋のかざりつけを、まぶしいほど立派にして。
 (一一) 源氏の君。
 (一二) 自然と遠慮もしないで。「かしこまり」は、人に對しておそれつつしむ心もち。



雨夜の品定め (帯下)



なが雨はれまなきころ、うちの御ものいみさしつづきていとど長居さぶらひ給ふを、大殿には、おぼつかなく恨めしくおぼしたれど、よろづの御よそひ、何くれとめづらしきさまに調じ出で給ひつつ、御むすこの君だち、ただこの御宿直所の宮づかへをつとめ給ふ。宮腹の中將は、なかに親しくなれきこえ給ひて、遊び・たはぶれをも、人よりは心やすくなれなくふるまひたり。右のおとどのいたはりかしづき給ふすみかは、この君もいともうくして、すぎがましきあだ人なり。里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入し給ふにうち連れきこえ給ひつつ、夜晝、學問をも遊びをももろともにして、をささ立ちおくれず、いづくにてもまつはれきこえ給ふほどに、おのづからかしこまりもおかず、心のうちに思ふことをも隠しあへすなむ、むつれきこえ

- (一) 清涼殿の殿上の間。殿上人のつめるところである。(口絵参照)
- (二) 人ずくなで。「人ずくななり」の連用形の一つの形。
- (三) 源氏の御宿直所も、いつもよりのんびりしている氣がするので。「出はいる人がないからである。
- (四) 燈火を近くして。「かのおしなべてにはおぼしき」と考へられるが、「かのおしなべてにはおぼしき」とざりし人を御前近くて(幻)といういい方にあわせて、大殿油を近くての意にとる。大殿油は、御殿にともす燈火をていねいにいう語。
- (五) 源氏のおそばのみ厨子。厨子は、くりやで食物などをのせるものに似せて作った、ものをのせておく棚。座右におく。
- (六) 男女のやりとりする手紙は、さまざまな色の紙にかかれる。
- (七) 引き出して。「取り出づ、思ひ出づ、言ひ出づ、見出づ」など、「出す」意に「出づ」ということが多い。
- (八) むちゃくちやに見たがるので。
- (九) さしつかえないようなのを、少しは見せましよう。(でも、そうがやみに引っぱり出されては)、ひよつと体裁のわるいようなのもあつては。「さりぬべき」は「さりぬべき」で、たしかにそうあることがでさるようなの意から、見せてもいいような、さしつかえないようなの意となる。↓「あるまじき恥もこそ」(七頁)
- (一〇) 「うちとけてかたはらいしとおぼされむ」が、体言になぞらえられ、「その」はそれにかかるのである。
- (一一) うちとけたので、見られては、そばではらはらされるようなこそ、見たいのです。
- (一二) ざらにあるような一通りのふみは。「見侍りなむ」にかかる。
- (一三) わたくしなどもの数ではありませんが。
- (一四) ふみのぬしのめいめいが。

雨夜の品定め



大殿油 (土蜘蛛双紙)

給ひける。つれづれと降りくらしてしめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人ずくなに、御宿直所も例よりはのどやかなるこちするに、大殿油近くてふみどもなど見給ふついでに、近きみ厨子なる色々の紙なるふみどもを引き出でて、中將ゆりなくゆかしがれば、

「さりぬべき、少しは見せむ。かたはなるべきもこそ。」

と、ゆるし給はねば、

「その、うちとけてかたはらいしとおぼされむこそ、ゆかしけれ。おしなべたる大方のは、敷ならねど、ほどほどにつけて、書きかはしつつも見侍りなむ。おのがじし恨めしきをり・待ちがほならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ。」

(一) 「怨ずれば」は、あとの「かたはしづつ見るに」にかかる。「やんごとなく……二の町の心やすきなるべし」は、かたはしづつ見る理由を説明して、はきみこんだもの。

(二) 大事なので、ぜひおかくしになるはずのなんかは。

(三) おおざっぱな。

(四) 第二流で、見られても気づかないのないふみなのだらう。

(五) 源氏は中將と、ふみのかたはしづつ見ると。「中將がうちむで、源氏は、中將に見せながら、自分も見心もちきある。中將の見るにまかせたのではない。また、気づかないふみだとはいえ、一つのふみを、初からしまいまで見せはしないのである。

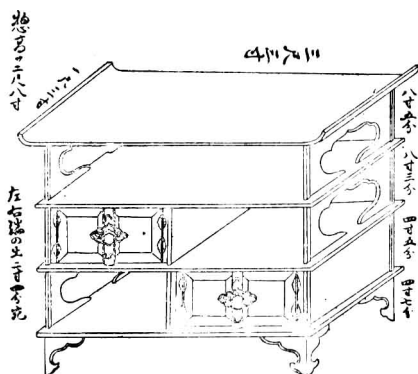
(六) あてずっぽうに。

(七) 中將がふみのぬしをたずねる。

(八) まるで関係のない人を、それではないかとひつけて考えて疑うのも。

(九) あなたのところにこそ。」源氏のこと。

厨子



(鳳闕見聞記)

と怨ずれば、やんごとなく切に隠し給ふべきなどは、かやうにおほざうなるみ厨子などにうち置きちらし給ふべくもあらず、深くとり隠し給ふべかんめれば、これは二の町の心やすきなるべし、かたはしづつ見るに、

「かくさまざまなるものどもこそ

侍りけれ。」

とて、心あてに、それか、かれかなど問ふ中に、言ひあつるもあり、もてはなれたる事をも思ひよせて疑ふもをかしとおぼせど、言すくなにてとかくまぎらはしつとり隠し給ひつ。

「そこをこそ多くつどへ給ふらめ。少し見ばや。さてなむ、この厨子も心よくひらくべき。」

と宣へば、